

おもしろいね！が、きっとみつかる

シニア世代の地域デビューを応援！

～アッティーヴォ～

attivo

「attivo（アッティーヴォ）」とは、イタリア語で
「活動的な、行動的な」という意味です。

みやシニア
活動センター
通信 vol.58

(令和7年5月発行)

時には、図書館でゆったりと

毎日忙しい思いをしていますが、先日ゆったりした気分になることが出来ました。そして、中央図書館に行ってみようという気持ちになりました。しばらくぶりに行ったので驚きました。「ある。ある。ある。ある。」 たくさんの本。そして人の多さ。黙って本を探す人、静かに本を読んでいる人、新聞をじっくりと読んでいる人。私は間違いなく本を借りに行ったのですが、たくさんの本を見て、読みたい本を決めることが出来ません。2階の閲覧室に行ってみました。ここはとても静かで勉強をしている人、何か書いている人、本を読んでいる人、様々です。番号札をとって席に着くことが出来ました。本棚からやっと一冊の本を選び、しばらくの間集中して読むことが出来ました。

日々、自分の時間を作ることはなかなかできません。しかし、図書館という特別な場所で、そして静かな部屋で大きなテーブルに向って本が読めるなんてなんと幸せな事でしょう。とてもリラックスできたし、いつもとは違った贅沢な自分の時間を持つことが出来ました。閲覧室から見える景色も見事でした。青空に映える木々の緑がとても美しく見えました。

皆様も是非時間を作って図書館に足を運んでみてはいかがでしょうか。素晴らしい時間を過ごせると思いますよ。さて58号は3人の方々の紹介です。



① 小川さん



② 福井さん



③ 栗原さん

- ① 江戸時代からの宇都宮の郷土玩具黄ぶなを私が守ります。
- ② 地域の消防団活動と歴史ある家業に頑張る福井さん。
- ③ 鳴子の音を響かせて。

○ 発行／編集 みやシニア活動センター（宇都宮市 保健福祉部 高齢福祉課内）

住所：宇都宮市旭1丁目1番5号 宇都宮市役所2階 高齢福祉課D8窓口

電話：028-632-2368 ホームページ：<https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp>

① 江戸時代からの宇都宮の郷土玩具黄ぶなを私が守ります 小川 昌信さん

取材：肥後特派員



昔、宇都宮に天然痘が流行して多くの病人が出ました。そこで村人は神に祈り、病気の治癒を願いました。ある日信心深い村民が病人に与えるために田川に魚を釣りに出かけました。その時鯉のような大きな黄色の鮒を釣り上げました。その鮒を病人に食べさせたところ病気はきれいに治りました。村人達は神に感謝し、病気除けとしての黄ぶなを型どり、毎年新年に神に備えるようになりました。

これが宇都宮の郷土民芸品「黄ぶな」の由来です。宇都宮の人なら黄ぶなのことは知っています。今回は黄ぶなを復活させたふくべ洞、小川昌信さんを紹介します。JR 宇都宮駅から宮の橋を渡り大通りを5分ほど歩きます。上河原郵便局の隣、左側に大きなふくべ細工と黄ぶなの置物が見えます。小川昌信さんは現在82歳。「伝統工芸では飯は食えない。」と言いながら顔は明るく笑っておられます。小川さんは栃木県伝統工芸士のおひとりです。

栃木県の伝統工芸品には黄ぶなの他、日光彫や益子焼などがあります。

宇都宮市の郷土玩具黄ぶなは宇都宮の唯一の民芸品として江戸時代から作られ代々受け継がれてきました。昔は農家の副業として貴重な現金収入でした。しかし時代とともに作る人がいなくなりました。最後浅川仁太郎さんが継承されましたが、20年前浅川さんは85歳で亡くなりました。黄ぶなの技術は2年途絶えてしまいました。そこで民俗学者であった尾島敏夫先生が小川さんに「宇都宮生まれ、宇都宮育ちのおまえが跡を継いで黄ぶなを作れ。」と強くすすめられて始まりました。「今では尾島先生に感謝している。」と言われます。小川さんの後継者も出来ました。大曾在住の大倉吉久さんです。「これで当面大丈夫だ。」二人三脚で黄ぶなの魅力を次世代に伝えていかれる事でしょう。

黄ぶなの特徴は配色の素晴らしさです。黄、緑、赤、黒が巧みに組み合わされています。黄ぶなは赤い顔をしています。決して酔っぱらっているのではありません。赤色は厄除け、病気除けの意味があります。福島の赤べこ、ダルマ、でんでん太鼓の赤と同じ意味です。

1995年に栃木で「国民文化祭」が開催され、秋篠宮殿下と紀子妃殿下が来県されました。小川さんご夫妻は黄ぶなのこと、その由来を説明しました。夕方に宮内庁から連絡があり2匹お買い上げ下さいました。小川さんは「嬉しかった。職人は作ったモノを買って戴くのが何よりも嬉しい。」と言われます。すごくいい話で温かい気持ちになりました。

皆さん、「ふくべ」とは何かご存じでしょうか。夕顔の実のことです。夕顔の果肉を細長くむいて乾燥させたものが栃木県の特産品の干瓢です。そのふくべの空洞になったものを乾燥させる。皮が固く引き締まる。その面に色鮮やかに絵付けする。これがふくべ細工です。その形を生かして炭入れや花器に使います。このふくべ細工を日光に来る修学旅行生に体験してもらいます。ここでお面を作ります。大変喜んでもらっています。これが小川さんのもう一つの生業です。5月の連休が終わると修学旅行のシーズンです。そこから半年、小川さんは大忙しです。

2030年にはふくべ洞さんの前的大通りは延伸したLRTが開通します。町並みは大いに変わるでしょう。それでも伝統工芸のふくべ洞は変わらないはずです。



② 地域の消防団活動と歴史ある家業に頑張る

福井 規悦さん

取材：高山特派員



今回、58号は福井規悦さんを紹介します。

福井さんは昭和38年生まれ。61歳になられます。昔の押切町、現在の三番町で生まれました。生家が染物業とあって田川のすぐそばで育ちました。福井さんは現在有限会社福井染工場の4代目として家業を引き継いでおられます。会社は明治36年創業、今年で122年目を迎えます。先代のお父様が栃木県伝統工芸品指定、栃木県伝統工芸士認定をとられました。今も主に祭り伴天、神社奉納幕、幟、その他多数のものを製作しておられています。

そんなお忙しい中、30年前に消防の第8分団に入団されました。宇都宮市第8分団は築瀬地区を管轄としています。この第8分団長を5年間務められ、現在は指導部長として後進の指導に当たられています。そしてもちろん現在も現役です。

入団して最初の思い出は、ポンプ操法大会に参加したことです。先輩の姿を見て夢中で操作方法を覚えました。水を早く出して的確に倒します。繰り返し繰り返し練習してポンプの扱いを覚えました。訓練はきつくプレッシャーを感じ放しだったことを記憶しています。当時4月、5月に練習して6月の第1週に市の大会が屋板運動公園で行われました。結果は、点数よりも宇都宮市で何番目という順位がつくのでそちらの方が気になり、緊張したそうです。しかし、この大会に出られることは大変名誉なことなので力も入ったそうです。

災害の時は、自分や家族を犠牲にしてもやらなければならないという覚悟で出動されたそうです。改めて消防の仕事の責任の重さを感じます。そのひとつひとつの積み重ねが私たち市民の生活を守っています。だから、消防の仕事はやりがいのある仕事であり、我々が安心して暮らせるのだと思います。

2019年10月、台風19号の影響で田川が氾濫しました。その際は田川周辺の家々を一軒ずつ見て回りました。安全かどうか、避難しているか置き去りになっていないか、水の被害はどうかを明け方まで確認して回ったそうです。自宅に帰ると家は床上浸水の状況で染物工場の機械も畳も家財道具も車も皆泥水に浸かりました。そんな時泥だらけのすべての品物を団員の方たちが全員で運び出してくれました。この事は一生忘れられない事ですと言っておられます。

毎日を忙しく過ごされている福井さんですが、田川の清掃、遊歩道の枯れ草取り、ゴミ拾いをやられます。また時間に余裕が来ると趣味の神社巡りや好きなギターを弾いたり、ドライブをしたりされます。若い頃はトライアスロンをやられていたそうで体を鍛えてあるので立派な体格をされています。福井さんの立派な体格と真面目で明るいお人柄に接して、人望の厚さと団員の皆さんから熱い信頼を受けておられることを感じました。頼りになる福井さん、これからも宇都宮市、地域の消防と防災、そして歴史のある家業のためにご尽力戴きたいと強く思いました。



③ 鳴子の音を響かせて 栗原 茂さん

取材：駒田特派員



シルバー大学校中央校 OB、そして「よさこいクラブ」代表の栗原茂（くりはら しげる）さんをご紹介します。2017年9月卒業の37期生である栗原さんに、当時を振り返っていただきました。

前職の定年退職を間近に控えた頃、職場の仲間からのお誘いで入学を決めたそうです。長い時の流れを経て、再び味わうことになった学生生活。キャンパスライフに更なる彩りを与えたのは、多種多様なクラブの存在でした。その数44もあったと聞き、大変驚きました。健康を気遣って、まずはウォーキングクラブに入部。手近なバス旅行を楽しみつつ、現地でのハイキングをエンジョイ。他にも幾つかのクラブに所属して、

活動的な日々を過ごされていました。そんな中、中央校にはないけれど、シルバー大学校南校にはあるクラブを知ることになりました。それが、“よさこい”との出会いでした。

興味を持った栗原さんたちは、早速見学に行きました。“南校学校祭”でよさこいを発表する姿を目の当たりにした時、すぐさま「これだ!! 自分たちもやりたい。」という衝動にかられたそうです。流れる音楽・鳴子の響き・踊る姿に魅せられて、中央校にもよさこいクラブを作りたいと考えるようになりました。クラブとして発足するには、一定の人数が必要なので、まずは同好会としてスタート。南校から先生を紹介していただき、指導を受けながら練習を重ねました。そうこうしているうちに、よさこいに興味を持った学生たちから、次々と入部希望の声かけられて来たのだそうです。多くの部員が集まって、いよいよ「よさこいクラブ」が誕生しました。

学校からの紹介やデイサービスなど高齢者施設からの依頼も受けて、ボランティア活動にも乗り出しました。年間10回にも及んだそうです。

宇都宮市内は勿論のこと、鹿沼や日光にも足を運びました。大学の理念である“地域活動”としての役割を積極的に担ってきました。

ボランティア活動の記録を見せていただきましたが、訪問先での様子がとても良く分かります。踊り手たちの生き生きとした表情。観ている方々の楽しそうな様子。曲に合わせて教えていただいた振付で鳴子を鳴らしながら一緒に踊る姿もありました。

今年に入ってから活動として、イベントへの参加です。3月15日（土）の“古河桃祭り”、3月30日（日）の“清原さくら祭り”、4月6日（日）

の“鬼怒川温泉スプリングフェスティバル”などでイベントを盛り上げました。鬼怒川では、実際に沿道で応援して来ましたが、総勢200人の踊り手たちが、ピンクの長いはっぴを翻し、鳴子の音を空に響かせながら踊るさまは、すごい迫力でした。

「よさこいには、自然と体を動かしたくなる力がある。心も踊る。それが魅力かな。」栗原さんは、こう語ってくれました。月3回、木曜日の午後のひととき、姿川地区市民センターで和気あいあいと練習しています。一度ご見学にいらっしやいませんか？

栗原さんの末長いご活躍を、心より願っております。

